

ポケットの獣な世界へ 来て何かと色々

優曇華の花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何か気付いたら草原にいた。

身格好も背丈も……変わってる。どうしろっていの？

バッグには暖かな膨らみ……え？大きなタマゴ？

駆け抜けた物を見れば……え？コ、コラツタ？

もしかして、異世界トリップって奴ですか？

目次

トリップって奴ですか？	1
対決って奴ですね。	9
決着の時みたいです。	20
博士さんとの話ですよ。	25
30 これからの事情、これからの行動を。	

トリップって奴ですか？

おかしい。

おかしい。

何がって、自分が今置かれている状況がおかしい。

さつきまで、小学校からの親友と会話を楽しんでいたのに。
ちよつとウトウトしていたら。

私——紅蓮は。

昔の姿で、森林の木の根もとに寝転んでいた。

☆☆☆

「何で……」

何があったのよ。私何も悪い事してないよ。

声も高くなってるしき。どうするべきなのよ？

ん……頭の所になんかあるっぼい。……紐？

お、バッグ。見覚えはないけど……近くにあったし、漁つても大丈夫でしょ。体を起こして、と。

ああ、先に今の私の服装を見てもらおうか。

二つに分けて結んだ髪の毛。肩までの長さ。

で、これはアホ毛って言うのかな？まあ、そんなんがある。以前にはなかった。

赤い襟の黄色っぽい白のブレザー。半袖。

で、膝までの赤いスカート。うん、女の子って感じた。

で、少し長めの白い靴下。靴は白と赤のスニーカー。

風が吹いてきて私のスカートが捲れそうになった。正直、そんな事を気にしていられる精神状態じゃない。

うーん、身形は昔みたいになってしまったわけだけど。

このバッグの中には何が入ってるんだろう？

ファスナーを開けて、最初に目に飛び込んできた物。これは……大きなタマゴ？

……え？

何これ？

これ、前に見てたアニメに出てきた物にすつごい似てるんだけど。

そう、あれは――

――ザッ!!

瞬間、私の隣を何かが走り抜けていった。

紫を基準とした、小さな鼠……を、モチーフにした、キャラクター。

「コ、コラツタ……!?!」

そう、あの有名なゲームの最初に出てくるキャラ。

ポケットモンスターの、コラツタである。

☆☆☆

どうやら、ここはポケモンの世界のようなのだ。

少なくとも、コラツタがいる世界ではあるようだ。

あ、でも、空を見てみれば何か飛んでいる。

鳩をモチーフにしたポケモン。あれは……ポツポだ。

あ、何か別なのが飛んできた。雀の目つきを悪くして、大きくしたようなポケモン。

あれは……オニスズメかな？

まあ、つまりだ。

もう一度言おう。

私は、ポケットモンスター、略してポケモンの世界へ来てしまったようだ。

☆☆☆

そうとなれば、この手元にあるタマゴはポケモンのタマゴで間違いないようだ。
触れてみると、ほのかに暖かい。

「……この中に、ポケモンが……」

そう考えると、ついつい顔が綻んでしまう。

なんというか、こう、母性をくすぐられるというか……。

と、こんな事をしている場合はない。

コラッタ、ポッポ、オニスズメとなればここはカントー地方かジョウト地方になるわけだけど……。

近くに町つてあるかな……？無いと困る。なんか風強いし。

鞆の中にコンパスかなんか無いかな？

……あつたのは、タオルと着替えのみ。

着替えは、今の格好と全く同じ。

お、帽子がある。……ベレー帽だ。

ん？帽子の内側に何か入っている。

……上下で色の違う、赤と白の球体。

ポタンのような物があり、押してみるとボールが大きくなった。

ポケモンの世界に来て、これは……やっぱり、モンスターボール？

えっと、このタマゴが孵ったらこのボールの中に入れていいのかな？

うん、そのために……タマゴを安全に孵せる建物を探そう。きつとあるはず。

☆☆☆

とりあえず、歩いてみますよつと。

鞆は肩にかけられる物だったのでそうして、タマゴはタオルに包んでバッグに入れてる。

うー、樹しか見えない。

風も強いし……。大丈夫なのかな、これ。

を、体内時計三十分間。多分もつと長かった。

で、今いるのはちよつとだけ拓けた場所。

いい加減疲れたので、座っているわけ。

うーん……。やつぱり体力が無くなってるなあ。これぐらいでバテるなんて。

さつきから強い風が体を撫でている。妙に心地よい。

……さあ、休んだし、ホントはもうちよつと休みたいけど行こうか。

立ち上がって、通れそうな所をなんとか探すと……。

『おや、人間ですかね？』

後ろから声がして。

振り返ってみると……。そこには。

一匹のポニータがいた。

「……………え……………？」

言葉が出てこない。

周りに人がいない。いるのは、このポニータのみ。

つまりこれは。

『ここら辺にはよくハンターが来るので立ち去った方がいいですよ。』

……まあもつとも、人間という種族には私達の言葉は理解出来ないでしょうが……』

いやいや、理解出来るんだけど。

どうすれば良いの？ どうしろって言うの？

「え、あ……………ふ、普通の人には分からないんですよ？」

あう、そんな答え方するんじゃないかった。

普通の人アピールが出来なくなってしまった。

私の中で後悔が渦巻く。

『そうなんです。……………もしかしてあなた、私の言っている言葉が分かるの？』

そうとはつゆ知らず。ポニータ……………さんは続ける。

ええい、こうなった以上、このまま話を続けるしかない！

「えっと、そうみたいです。」

……私が凄いですか？ あなたが凄いですか？」

『どう見てもあなたでしように……』

ですよー。

最後の望みも絶たれた。

私が打ち拉がれていると、ポニータさんは続けた。

『とにかく、さつきも言ったようにこの森は危険です。

道が分からないというなら私が案内しますが……いかがですか？』

「うう………お願いします」

まあ、このままよりはよっぽど良い。

さあ、歩き出そうというその時！

「こっちにも一匹いるぞー！

ガキも一緒に居やがる！」

そんな声が聞こえて、ついつい歩を止めてしまったのが運の尽き。

おや、おやと言う間に私達は怖そうなおじさん達に取り囲まれてしまった。

私のトリップ生活は、のんびりではないかようです。

対決って奴ですね。

「アーボ、毒針だ！ガキの方にな！」

「ヨーギラス！あの子供に岩落とし！」

「ツ——！あつぶない！」

獣道とも言えないような木々の間を、転がるようにして通り抜ける。

なんで人間にポケモンを嚇けるのよ！……いや、まあ、私しかないからなんだけど
さ。

いくら作戦でもこれはきつつい！

ああ、あれはこの怖い大人が現れたすぐのこと——

☆☆

「おい、ガキ。そのポニータはお前のか？」

怖い大人の一人が問いかけてくる。

んー……、どう答えよう？

ちらつとポニータさんを見ると、彼女は意を決したかのようにこう言った。

『私の事はいいです。私を置いて逃げてください』

即ボツ。いい案とは言えないよね。

だって、知り合いがハンターに捕まって売り払われたりするって、次の日からの目覚めが悪くなるだけじゃん。

私はそんなの嫌だ。安らかな目覚めを享受したいしね。

「そうだよ。それで、何？」

さて、布石は十分。布石って言えるような布石じゃないけど。

……さて、どうしようか。

敵は十人、全員モンスターボール完備。うぐ、これには匠もご満悦だ。

「妙に敵対してるな。俺達の目的も分かっているのか？」

「……」

「……おい」

「、………何？」

む、考え事をしていること、ばれたかな。

「おい、まさかどうやってここから逃げるかーとか考えてるのか？」

「マジでか！ いったてえわあw」

「俺達に見つかったのが運の尽きさー！」

「おとなしく捕まれよなー」

ぐぐ……今のところ、いい方法は思いついてない。

人数差もありすぎるし、やっぱ世の中は数なのかな……。

……あ、人数。

そうよね、少ないなら増やせばいいのよ。

となれば……。

「ポニータさん、私の言うことを少しの間だけ聞いてくれる？」

『……何か、考えがあるのですね？』

……分かりました。あなたに従いましょう』

「……ありがとう」

ありがたい。いやはや、本当に。

本人曰く、使える技は……お、使えそうなのがあるね。

さあ、恐怖心を押さえて敵と向き合う。

……あまり格好いい顔とは言えない。

「さあ、無駄な作戦会議は終わったか？」

「ハッ、まさにその通りだぜ」

「無駄なあがきはしねえことだな」

いちいち癩に障る奴らだ。

ま、すぐにお縄になって貰えるだろう。

……ぐらいの自信を持たないといけない。

さあ、運命の時。ここを上手くやらないと何もかもおしまいだ。

敵が——動くっ！

前方に指を指して、ポニータさんに指示を出す。

「煉獄れんごくッ!!」

「「うああっ!?!」」

ポニータさんの体から異様なほどの熱が放出されている。

……のだろうけど、私には心地よい暖かみにしか感じない。

あー、あれか。確か、敵意のない者には何もしないんだっけ。

さあ、ポニータさんに乗り、誰も居なくなつた方向へダツシュ!

☆☆

そして、今に至る。……あれ? ちょっと飛んでる?

そうそう、ポニータさんには森の仲間を呼んできてもらっている。

うん。数が少ないなら増やせばいいってね。

だから、今、ポニータさんはいない。

つまり、人間の身一つって事ね。……大変だなあ。

盾になりそうだったバッグも、タマゴが入ってるからポニータさんに持つて行つても

らつたし、身を守る物は一つもありません！

強いて言えば、そこら中に落ちてる木の枝とか、葉っぱだけ……。

うーん……武器としては使えそうだけど、ちよつと防具にはならないかな。

「もう一度、毒針！」

「悪の波動！」

また放たれたそれは私の顔のすぐ横を通りすぎていき……!?

危なっ!?!グ、グレイズ、グレイズ。得点貰えへんよそんなん。

何とかよけて、拓けたところに出ると――

「……最悪」

「よお、ゲームオーバーの時が来たな」

「まんまと引つかかってくれるなんてなw」

怖い大人（Lv31程度）が、5人も待ち伏せていましたよ……。

多分、他の人はポニータさんを追っていったんだらうけど……。

あーあ、畏だったのね。まんまとおびき出されたってことか。

「さあ、俺達に逆らって……どうなるか、体で覚えてもらわねえとなあ!!」

「おい、卑猥なことすんじゃねえぞ?」

「そんな事考えるお前が変態wwww」

「うっせ」

「まあ、それもいいかも知れんなあ?」

だんだんお話が聞いてはいけないムードになってきた。

……いくら見た目10歳だからって、女の前でそんな事言いますか?

理解が出来ないよー、したくもない。

でも、そろそろやばいかな。逃げ場は……無い。

「ま、まずは黙らせてからにしようぜ」

「だな」

「よし、アーボ! 毒針だ! 足を狙え!」

「——いッ!?!」

は、早い!

さつきまでの攻撃が嘘かのように、目にもとまらぬ早さで、毒針は放たれた。もちろん、そんな物をよけられるはずはなく、私の足には数本の紫色の針が深々と刺さっていた。

☆☆

Side | 炎を纏う馬の子

『なに、最近暴れている輩を捕らえられるかもしれないとな?』

『はい、この森の住民を幾らか集めれば、何とかなると』

『……誰が考えた?』

『……人間です』

『ならん。協力してはならん』

『ですが、彼女は、今まで出逢った人間の誰とも違う目をしていました。

まるで、何も信じておらず、全て信じているような……不思議な、目を』

『……む。』

何かあれば、お主の責任となるぞ?』

『心得ております』

『そこまでと言うのなら、許そう。』

皆の衆！今から、この娘子に続き、厄介な輩を征伐しに出る！
力に自慢のある者、奴らに因縁がある者、全てが参加せよ！』

——ウオオオオオ！

よし、これでこちらは安心ですね。

いつもながら、森の長を説得させるのは大変ですね。

さて、早く戻らないと……と？何か来ますね。

……スピアー。見覚えがないあたり、よそ者でしょう。

このタイミングで流れ者が来るとは考えられませんし、奴らの仲間でしょうか。

「スピアー！ダブルニードルだ！」

『煉獄！』

飛んできた二回の攻撃をしつかり打ち落として、喚びてきた者に向き合います。

……あの、面倒な輩が三人、ですね。

「すっげー、ポケモンが大量だぜ」

「全部まとめて売り払うか？」

「いや、何匹か俺達のポケモンにしようぜ。丁度良さそうなのが数匹いるしな」
なんだか失礼なことを話してますね。

この数に勝てるでも思っているのでしょうか。

『こいつ等か。』

……俺が手を下そう』

『長!? よろしいので?』

『僕の森を荒らした刑罰は僕が与えなければいけない。』

……下がっておれ』

『……分かりました』

長は、その大きな体を動かし、背中の花から伸びている太い太いツタを敵さんに向けて
ました。

……ああ、長は人間に「フシギバナ」と呼ばれる種類の方です。

永く生きておられているようですが、私は長が戦う姿を見たことはありません。

その理由は、長が平和を望んでおられるからです。

物心ついてからずっと長にお仕えしてきましたが、ここまで好戦的になられている姿
は、皆、珍しいと言っています。

それほどまで、長は敵意を向けておられるのです。

「……おい」

「……ああ」

「……やばそうなのが来るな」

「逃げるか？」

「いや、見たところ出てくるのはあいつ一匹だけだ。畳み掛ければいける」

「よし、いくか」

『話は終わったか、あはれ憐れな人間どもよ』

『長、くれぐれも無理はされないように』

『心得ておる』

「よし、いくぞ！スピアー！」

「ラッタ！いけ！」

「ドガース、突撃だ！」

襲いかかってきた三匹のポケモンを、長は一瞬で……樹に叩き付けました。

樹に叩き付けた、という事さえも、数秒経ってから気付いたことです。

オマケに、長は、

『何。この程度か。』

『この森の戦闘指南も考え直さなければな』

等と仰っておられるので、私達は呆然。

「な、あ、ああ……」

「ば、化け物だ……」

「こ、殺される……!」

『皆の者、取り抑えい』

その言葉で正気に戻ったのは僅かでしたが、そんな数で捕らえられるほど彼らは脱力していません。

そして私達は匂いを頼りに、できる限り早く、あの不思議な人間のもとへむかっただです。

決着の時みたいです。

side | 炎を纏う馬の子

『……向こうですね』

複数の人間の気配がしますし、あの不思議な人間の臭いもします。

それに……森が一番ざわついています。

さて、そろそろ別れる頃合いですかね。

『先ほど決めた数匹は向こう側へ回り込んでください！』

それと、ヨルノズクさん。よろしくお願いします！』

彼の者達がいるのは、運良く人間の住む町のすぐ近く。

数匹にはギリギリ出口側へまわって貰います。

そして、たまたま寄っていたという、ヨルノズクさんに応援を呼びに行つて貰います。人間を捕らえるのは我々のみでも可能ですが、その後は私達にはどうも出来ません。ですので、人間は人間に始末を……と。

……時にあのヨルノズクさん、ずいぶん小柄で綺麗な色をされていますね。

閑話休題。

そうもしている間に、現場へたどり着きました。

『居ました！あいつ等です！』

《あいつ等か！》 《もう我慢ならねえ！》 《容赦はしねえ！》

皆さんに伝えつつ、場へ躍り出、私に皆さんが続きます。

皆さんフラストレーションが溜まっているのか、多少言葉が悪いのはご愛敬。

それに、私だつてもう自分を抑えられませんしね。

皆さんと一気に場へ躍り出ます。

「な、何だこいつら!？」

「おい、こいつら、もしかして……!？」

「もしかせずとも、この森のポケモンか!？」

「な、囲まれてるぜ!？」

「何い!？」

私達の本願は、密猟者の捕獲。

ですが、私自身の目的はそんなゴミ達のことではありません。

あの人間は——ッツ！

「はは……グッド、タイミング、だね」

私の目的、それはあの不思議な人間でした。

しかしその人間は、体中ボロボロで、さらに、足に深い傷を負っていました。

……あれは、毒針か何かでしょうか。

ポケモンでも何でもない、人間が、そんな傷を負って、平気なはずがないのです。

でも、あの人は、両手を地につけ、笑いながらこちらを見つめています。

もう、意識も薄れてきていると思われるのに。

どうして、そんなに――

「ツ――！お前ら……この人間がどうなってもいいのか！」

なっ！人質まで――！

なんと愚かしく、無様な生物なのでしょう。

人質に取られた彼女は、最初何を考えているのか分からない顔をしましたが、すぐに目つきを鋭くすると、男の前へ手の平を出し……？

彼女の手から何かが飛び散ったかと思えば、彼女は解放されていました。

あれは……土？

しかし、せつかく解放されたにもかかわらず、彼女はその場へ倒れ込んでしまいました。

限界が来たのでしょうか。ですけど、安心してください。

もうこの場合は、治まりますから。

だって、ほら。

密猟者共は皆さんが眠らせましたし、空を見ればヨルノズクさんがいます。

もう、安心ですよ。

だから、私たちは密猟者どもへ――

side | 不思議な不思議な両語理解人間

……うーん、眠い。

いつの間にか、すっかり眠ってしまったみたい。

何してたんだったけ？

えっと、友達と私の部屋で話していて、用事が入ったからもう帰ると言われたから見送って、眠たかったから目覚ましをかけて寝て。

……うーん、今がその続きなら、私は目覚ましで起きていて、今は目覚ましの音が鳴り響いているはず。

つまり、違う。

んーと、その後になんかあったっけ？

あ、なんか分からないけど、違う世界にいたんだっけ。

ポケモンがいて、ブラブラしてたらポニータに出会って、おまけにハンターにも見つ

かって、それで——ッ!

やばいじゃん! と思い、目を開けてみる。

……部屋?

足を見てみれば、包帯が巻かれている。少し痛むけど、動かせないほどではないかな。ここはどこだろう? もしかして、あのハンター絡みだったり……いや、無いか。

確か、ポニータ……さんが助けに来てくれたから、おそらく味方の家か何かの中だろう。

でも、病院とかじゃないんだね。ポケモンセン（ry

とか考えてると、部屋のドアが開いた。

「あ、目が覚めたんだね!」

『だねー!』

そこからは、室内帽子の少年と、その連れであろう茶色っぽい兎(?)が出てきた。んー、取りあえず、一言。

「もうちよつと声を抑えてくれると嬉しいかな、うん」

「あ、うん、そうだよな。ごめん」

『えー? 何でー?』

うん、平和で何より!

博士さんとの話ですよ。

「……で、どこ、どこなんでしょう？」

やっと静かになってきたところで、話を切り出す。

いや、さ。茶色い兎、おそらくイーブイ君が私の上に乗ったり私の上に乗ったり、さらに私の上に乗ったりしてきてさ。

で、微かに腕に触れたとき、すっごいモフモフだったのね。

人「人」人「人」人

〽 見せられないよっ！

Y? Y? Y? Y? Y? Y

なことはしてないけど、ちよつとだけ、ね？

「うん？……？ 僕の師匠の研究所だよ」

研究所とな。

どうして研究所にこんなベッドとか、ベッドだけが置いてある部屋とか、なんだかお値段高そうな絵とかがあるのかは疑問だけど、きっと仮眠室なんだろう。

で、その少年はこう続けた。

「君も名前は知っているはずだよ。オーキド博士のこと」

「……ぱーどうん？」

この少年は今なんと。(あ、今の身長的には私のほうがちっさいんだった)

オーキド博士。

……あの、ゲームでもアニメでも有名なお方の、研究所とな。

「僕はこれから用があるからもう行くけど、余裕が持てたら1階の博士の部屋に行つてね。んじゃー!」

『ぱーぱーいー!』

え、置いていかれるんですか。

放置ですか。そうですか。

え、これもう一回寝ちやダメつすか？

☆☆

「おお、目が覚めたのか!」

そう言つて安心したように笑う、私の目の前のおじいさんが、世界的権威のオーキド

博士。

フルネームはオーキド・ユキナリ博士で、昔セレビイに出会ったことがある。

昔は早押しユキちゃんと呼ばれていて——これはどうでもいいか。

オーキド博士はにこやかな顔をやめて、こちらを見てからこういった。

「で、お主の家はどこじゃ？」

あまり見ぬ顔じゃが、隣町から来たのか？」

Oh、家を聞かれてしまった。

この世界に私の戸籍はないだろうし、『私』の存在があること自体おかしいだろう。

考え込んだ私を博士は黙り込んだと捉え、おそらく勘違いをして言葉を発した。

「家出でもしてきたのか？」

「……家出なんかはしてません」

「では、お主はどこから来たのじゃ？」

むむ、なんか誘い込まれている気がする。

家出したかときいて、相手が何か言うのを待つて——この人、もしかして黒い人？

あれか？人によって態度を変えているのか？主人公にはいい顔して、他の人には違う

顔を見せているのか？

と、とにかく、前の人からの威圧感がすごいので、嘘にならない程度にゴタゴタいう。

「……とても、遠いところからきました」

「ほう、どこじや?」

「どこだと思えます?」

「ふーむ……不思議な娘じやのう」

さ、早速不思議ちゃん判定ですか!?

「不思議な娘つて……もつと、他の言い方とか」

「うむ。お主についてはもうこれ以上言及しないでおこう」

「いや、ありがたいですけど。無視ですか」

「はっはっは。大人びているな。……そうじや、自己紹介をしていなかったな。オーキ

ド・ユキナリじや。皆からはポケモン博士と呼ばれておる」

「紅蓮……クレンです。私つて何歳に見えますか?」

「うーむ……11歳、いや10歳か?」

「あはは、そ、そうですよねー。じゆ、11です」

やつぱりかー。やつぱり子供に見えるかー。向こうでは17歳だったんだけどなー。

精一杯意地を張つて11歳と言つておいた。だつて、だつて、だつて。

「そういえば、クレンに会いたい人……とも言えんが、まあ待つとる者がおる。

外へ出て見なさい」

私に会いたい者とな。あの言い方からして、人間じゃないみたい。

博士に促されるままに外へ出ると、そこにいたのは——

『待ってましたよ』

私の鞆を持っている、炎の子馬でした。

これからの事情、これからの行動を。

「ポニータさん！あ、私の鞆……」

『中身もちやんと無事ですすよ。すぐに渡そうと思っていたんですが、人間さんがさっさと連れて行ってしまいましたね……』

「うん、ありがとう。いろいろと」

ポニータさんが提げていた鞆を両手で回収する。

ポニータさんの熱が移っていて、少し暖かい。

改めて自分の肩にかける。ずっしりとしたタマゴの重みを感じられる。

「そのポニータとクレンくんは仲がいいようじゃのう。良きパートナーになれそうじゃ」

「博士？いきなり何を……」

博士がいきなりブツブツと言い出した。傍から見れば結構危ない。

その本人は何かを決めたようで、固い目でこちらを見てきた。

「クレンくん。旅に出てみんか？」

「……はい？」

☆☆

博士からの、旅に出てみるかという提案。

私はそれに頷いたし、ポニータさんも話をしてくるそうだ。

でも、私の我侷だけど、この卵は安全に孵してあげたい。

そのことを博士に言ったら快く、暫く泊めてくれると言ってくれた。

優しい……黒いとか言っでごめんなさい、博士。

で、今は博士のお孫さん、ナナミさんが今家主となっていているらしい家に向かうことになった。

ナナミさん……ゲームじゃタウンマップをくれたり毛づくろいをしてくれる優しい（これは想像）お姉さんだったと思う。

弟は主人公のライバルで、名前は……あれ、どっちだろ。

ゲーム、ポケスペではグリーン。アニメではシゲル。……どっちでもいいや。

ナナミさんは元コーデイナーで、ポケモンジャーナルに特集されるほど。

紅茶が好きで、時々タママシデパートに……これはどうでもいいか。

「さあ、着いたぞ」

バッグ

▽にげる

逃げられない！



たたかう

▽ポケモン

バッグ

にげる

ポケモンが いない！



たたかう

ポケモン

▽バッグ

にげる

きがえ

たまご

おいしいみず

かろりーまいと

? (^ p ^) / ドウシテドンドコド

▽たたかう

ポケモン

バツグ

にげる

抱きしめられて 行動が できない!



や、無理。普通に無理。何をしろと。

あれ、なんだか苦しくなってきた。ナナミさんは多分力を緩めてないのに、フシギダナー。

「ナナミ、やめんか! クレンくんが昇天しかけじゃ」

「え? あ、だ、大丈夫!? 口からなにか白いものが! 今すぐ入れてあげるからね!」

「ま、待て! そつとしておいたほうが……」

「そりゃああああ!」

口には何かがあつ込まれた。同時に、どこか飛んでいた私の理性は戻ったと思う。メイビー。

でもきつと、何か別の物が飛んでいったと思う。

「ふむ、案外大丈夫そうじゃのお」

明らかに大丈夫ではない私へそう呟いた博士は、万面の笑みを浮かべてさらにこう言った。

「では、クレン君も来たことじゃし、クレン君には三人分の食料を買ってきて貰おうかのう」

「え」

「ナナミにはワシの手伝いをして貰うぞ。こつちへ来い」

「はいーじゃ、クレンちゃん、お買物よろしくね」

「え」

前言撤回、あのお爺さんは真つ黒だった。

まさか、本当に三人分の食料を買わせられるとは思わなかったけど、ナナミさんはいい人だった。

……ナナミさんは。

それから毎日、雑用をさせられ続けていたことをここに記す。

あの人、真つ黒すぎて光沢が出てるよ……。